国労東京地区本部

2025年12月14日
地区本部ニュースNo.３
発行責任者　松田　恭明
編集責任者　佐藤　賢一

東京第二分会も結成

東京地区本部2分会体制がスタート

12月9日、首都圏地本会議室にて、14人の仲間が参加して東京第二分会第1回定期大会が開催された。

10月に開催した東京地区本部第1回定期大会で2分会体制が承認され、先月の東京第一分会結成に続き、新たな2分会体制がスタートした。

人数は少なくなっても国労運動の核は「分会運動」である。分会での議論を大切に、上部機関とも連絡を密に取りながら運動をつくっていこう。

新分会の結成ということで、地区本部の東組織部長の司会で始まった。来賓の首都圏地本松吉副委員長は「上部機関から組織再編をしているが、皆さんがやりやすい方法で進めていただきたい」と挨拶。続いて松田地区本部委員長は「集まる場をしっかりとつくっていただきたい。職場では社員同士の足の引っ張り合いなどにより、若年退職者が増えている。共闘関係も含めて、自分たちに何ができるのかを無理のないように考えていただきたい。来年度にはJR東日本の体制が大きく変わる。交渉単位も含めてこちらも体制を整えていく」と挨拶をした。

はじめに規約（案）が提案された。第一分会の時と同様に「大会の成立」の部分が若干問題になったため、新執行部での検討課題となった。

続いて新役員の選出を行い、鶴間書記長が運動方針（案）を提起して全体討論に入った。中谷執行委員から予算（案）が提起され、若干の修正をして方針と予算が確立された。以下全体での議論を報告したい。

Aさん

北部労協とかかわっている。どこの組合も若手の育成と組織問題で悩んでいる。誰のために活動するのかをはっきりさせ、目的意識をもって活動することが大切なことだと感じている。

Bさん

東京全労協定期大会に参加してきた。今、郵政職場がマスコミ等からたたかれている。昔は権利の全逓と言われていたが、現在は会社と一緒に合理化を推進している、と報告があった。しかし郵政ユニオンは、労働委員会なども活用しながら職場の問題を改善させている、との報告もあった。そうは言っても新しい仲間を加入させる取り組みは進んでいないようだ。

共闘関係は切ってはいけない、と感じている。

これだけ大勢への連絡体制はどうする？

回答：執行部のグループラインを作成して、そこから一般組合員へも伝わるように考えないといけない。そういった意味からも班体制はあったほうがよいと思う。

第一分会の結成時、分会が班の活動の壁になってはいけないという議論もあった。駅なら駅、運転は運転という風に分会を超えて集まる場みたいのはできないものか？というような議論もされた。今後の検討も必要ではないかと思う。

上記のような質疑応答があり、今後の検討課題とした。最後に野澤分会長の団結がんばろうで大会は無事に終了。懇親会の場所へと移動した。

執行委員長
野澤　浩司
（上野統括センター）
執行副委員長
古城　政明
（ルミネクリエーツ北千住）
書記長
鶴間　武
（隅田川機関区）
執行委員
中谷　慎一
（日本電設工業）
岡本　篤哉
（ビルテック東京）
根本　昭夫
（ＪＥＳＳ秋葉原駅）

私たちに正月はいつ来るのか

怒りのJAL本社大包囲行動

12月9日の夜、JAL争議団とJAL争議支援全国ネットワークの共催で「12・9JAL本社大包囲行動が開催され、支援者約700人が結集した。国労からはOBを含めて8人が参加し、一時間にわたって本社前集会を開催した。

不当極まりない首切りから早15年、16回目の正月が来ようとしている。15年前の大みそかに解雇され、それ以降、本当の意味での新しい年は来ていないのではないか、そう思わざるを得ない。

参加した仲間の一人はこう言った。「国鉄闘争も長かったけど、JAL争議も長いよね。解雇された仲間は年齢を重ね、争議の途中で亡くなった仲間もいると聞いた。この15年間を経営陣はどう思っているのかな」と。来年こそ解決の年にするため、連帯して頑張ろう。

全国から多くの連帯する仲間が結集した。支援する釧路の会からの挨拶では「私も元国労で闘争団でたたかいを経験してきたが、争議団・原告団自体は闘いの規模を大きく出来ない、勝利するのは支援の力、支援の力はいくらでも大きく出来る」と話された。

あーそうなんだよな。国労は、その大きな支援の力によって国鉄闘争を解決する事が出来たんだ、と改めて思い返した。

JAL争議も国鉄闘争も根っこは一緒、物言う組合をつぶすこと。ならば今度は私たちが応援する番。大した事は出来ないが、街宣に参加したり、物販に協力したり、仲間を誘うことは出来そうだ。勝利に向けがんばりましょう。